

# 雲南省訪中団報告レポート

氏名：北川翔

今回、雲南省を訪れる機会を得て、自然と人との出会いの両面で非常に充実した体験をすることができました。まず心に残ったのは、石林や棚田といった雲南ならではの雄大な自然です。カルストや棚田は日本にもありますが、規模が全く違いました。これらの景観を自分の目で見て、教科書や写真だけでは決して得られないものを感じました。



もう一つ心に残ったのは、金平県での小学生との交流です。米兵に立ち向かう人民解放軍の絵を自ら描いて、私たちにハキハキと解説したり、共産党への忠誠を示したりする少数民族で小学3年生のかわいい女の子は特に印象的でした。与えられた背景のもと、洗練されたその姿に深く感心するのと同時に、自分の小学生時代と彼女の姿を比較し、深く考えることができました。こういった機会に巡り会えたことにとても感謝しています。また、この旅で得られたもう一つの大きな財産は、人との出会いです。現

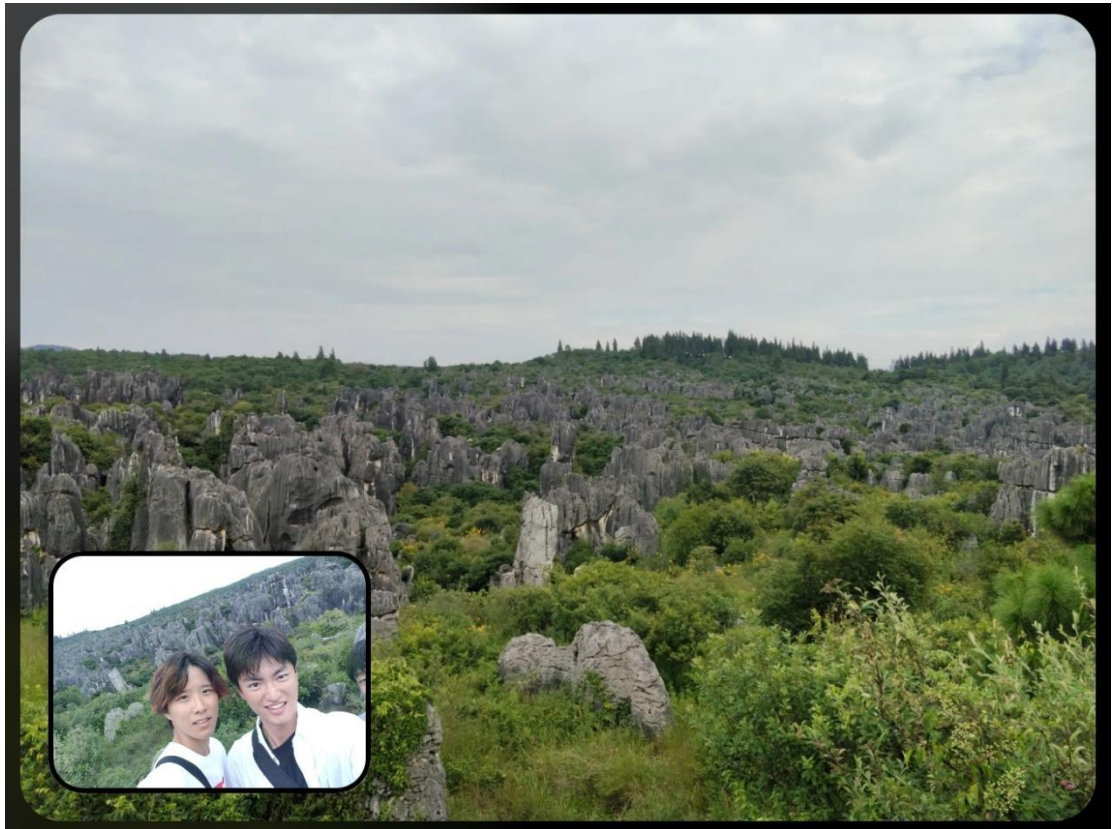
地の方々は温かく迎えてくださり、日常生活や文化について直接話を聞かせていただくことで、多民族が共生する雲南の豊かさを実感できました。加えて、同行した団員の皆さんとも交流を深めることができ、普段の大学生活やアルバイトではなかなか出会えない多様なバックグラウンドを持つ仲間と雲南を旅できたのは本当に貴重な経験でした。

今回の訪中国は、私にとって忘れがたい体験となりました。今後もこの経験を糧に、中国の文化や社会への理解をさらに深めていきたいと考えています。



この度は関係者の皆様の協力のもと、中国雲南省訪問という貴重な体験をさせていただきありがとうございます。雲南省は普段なかなか個人では行く機会がない場所であり、今回の訪問は今後の私の人生にとっても大変意義深いものでした。この旅では、日中ともにおそらく出会うことのなかっただろう他大学の学生と交流することができ、まずそれがとてもよい経験でした。また、最初は食文化の違いに少々苦戦しましたが、次第に慣れ、その多様性も楽しめるようになりました。さらに、英語が意外と通じない場面が多く驚きましたが、それがかえって現地の人々との直接的なやり取りを促し、なんとか伝えようとしてくれる親切さを実感するきっかけとなりました。民俗村では華やかな民族衣装や独特の建築に触れ、中国の多彩な文化を体感することができました。

このような数ある訪問先の中でも、特に心に残ったのは「石林」の景観です。日本でも秋吉台や四国カルストなど石灰岩地形を見る機会がありますが、雲南省の石林のように壮大で圧倒的なスケールを持つ景色には出会えません。岩がまるで森のように連なり、自然がつくり出した芸術に感動しました。ガイドさんの説明によれば、この一帯はかつて海であり、インド大陸がユーラシア大陸に衝突したことによる隆起によって現在の姿が形作られたとのことでした。一直線に割れた岩の割れ目がその証拠だそうです。人間の想像を超える自然の力と、その壮観さを肌で感じられたことは、今回の旅の中で最も忘れられない体験となった一方で、自然保護の観点では少し残念なところもありました。かつてはその石林の化石を地元住民が観光客に売ってしまったり、石林そのものに文字が刻まれているところを多く目にしました。中国は歴史が長く、数多くの貴重な自然や歴史的建造物がある国の一つであり、もっと地元住民やはたまた観光客にも保護活動を促進する運動があればいいなと思いました。



# 訪中団報告書

## □ 全体的な感想

今回の雲南訪問は、私にとって非常に印象的な旅となりました。正直なところ、出発前は雲南という地名すら知らない状況でしたが、実際に現地を訪れることで、この土地の魅力を深く実感することができました。昆明植物園では豊かな自然環境に圧倒され、雲南の生物多様性の素晴らしさを目の当たりにしました。その一方で、昆明-シンガポール鉄道計画をはじめとする東南アジア諸国との経済連携に関する情報に触れ、雲南が秘める今後の発展可能性の大きさも感じ取ることができました。さらに、現地の少数民族の方々との心温まる交流を通じて、雲南の人々の温かな人柄にも感動しました。総じて、この旅を通じて雲南という地を心から好きになることができました。

## □ 特に印象的なこと

数多くの見どころの中でも、特に石林の光景が深く印象に残っています。広大な面積に広がる奇岩群の自然の雄大さには、ただただ魅了されるばかりでした。現地ガイドの方から、太古の昔この一帯が海底であり、長い年月をかけた地殻変動と浸食により現在の景観が形成されたという説明を受けた際には、大変驚かされました。石の表面に残る水平な縞模様が、かつての海底堆積の証拠であることを知り、地球の歴史の壮大さを実感しました。このような貴重な世界遺産を実際に自分の目で見て、足で歩いて体験できたことは、中国という国への理解を大きく深める貴重な機会となりました。

## 中国雲南省報告書

今回の雲南省訪問を通じて、私は大きく三つの学びを得ました。

まず、中国に対する自分の中の偏見が大きく変わったことです。訪問前は、日本で耳にする報道や限られた情報から、中国に対してどこか距離を感じていました。しかし実際に現地を訪れ、人々と直接触れ合う中で、その温かさや素朴さ、そして暮らしの豊かさを肌で感じることができました。日本からの情報だけでは決して知り得なかった「本当の中国」に出会えたことは、私にとって大きな発見でした。

第二に、雲南の郷土料理の魅力です。日本で馴染みのある中華料理とは全く異なり、少数民族ごとに独自の食文化があり、新鮮な素材を活かした豊かな味わいが広がっていました。料理を通じて文化の多様性を体感できたことは、食が単なる栄養摂取ではなく、その土地の歴史や人々の営みを映すものであると再認識させられる経験でした。

第三に、他大学の学生たちとの交流です。異なる背景や専門を持つ学生とともに活動することで、自分にはなかった視点や考え方に触れることができました。国境を越えるだけでなく、大学の垣根を越えたつながりが、人を成長させる力を持っていることを強く感じました。

今回の訪問は、単なる異文化体験にとどまらず、自分自身の価値観を見つめ直し、広い視野を持つきっかけとなりました。この経験を、今後の学びや社会との関わりの中で活かしていきたいと考えています。貴重な機会を提供していただきありがとうございました。

## 訪中団を振り返って

### 【全体的な感想】

今回の訪中では、自らの足で現地を訪れたからこそ、雲南が多様な人々や動植物、文化、産業の交わる、魅力あふれる地であることを深く実感することができた。同時に、日頃ニュースや新聞で目にするものとは異なる、中国のありのままの姿にも触れることができたように思う。しかし、今回の訪中で得た経験は、中国という大国を形づくる広大な世界を理解するための第一歩にすぎない。現地のガイドの方も、「万里の長城や故宮を訪れてこそ、中国を訪れたといえる」と語っていた。その言葉の通り、中国には地域ごとに独自の歴史や伝統、文化が息づき、まだまだ未知の魅力が広がっている。今回の訪中を通じて、実際に自分の目で世界を見たいという思いは一層強まった。その一方で、世界はあまりにも広大であり、すべてを自らの足で確かめることは不可能だからこそ、想像力を働かせることの大切さも改めて痛感した。「百聞は一見に如かず」ということわざの通り、実際に自らの目で確かめる経験は、間接的な知識では得られない生の実感や理解という、他に代えがたい価値を持つ。見ていない部分や見られない部分は想像力で補う必要があるが、その想像力もまた、実際の体験を基盤に育まれることを再認識した。今回の訪中で得た知見を礎に、今後は他地域や他国についても想像力を働かせながら、理解を深めていきたい。相互理解の姿勢を根底に据え、この経験を新たな起点として、さらに視野を広げていくことが不可欠だと感じている。

### 【特に印象的だったこと】

街並み雲南の街並みは、ベトナムの国境に近い土地ならではの雰囲気の色濃く残っていた。街中を縦横に走るバイクや、屋台や市場の活気にあふれた通りの様子は、中国で見られるとは思えないほど異国情緒に満ちるものであった。自然細い山道を登り、たどり着いた壮大な棚田の景色は、飛行機の窓から眺めていたあの風景そのもので、目の前に広がる光景に、自分が立っていることが信じられないほど不思議に感じられた。都会の喧騒から隔絶されたその場所は、一面に広がる棚田や森林、様々な動植物が共存する豊かな自然そのもので、星空の下で過ごす時間は、まるで自然と一体になったかのような、貴重で忘れがたい体験となった。

## 教育

訪問した小学校では、都心から離れた地域でも政府の教育が徹底して行き届き、子どもたちが学んだことを生き生きと実践する様子に驚きを受けた。個性と才能あふれる作品や明るい歌声は思わず感嘆してしまうほどのものであった。

## スマートフォンと IT 社会

驚いたのは、貧しい地域であっても老若男女がスマートフォンを手に行している光景だった。道路やインフラが十分に整備されていない場所でも、情報端末は生活に欠かせない存在となっており、中国が IT 大国といわれる所以を垣間見ることができた。チェーン店での買い物の際、絶えず出前の配達員が訪れる様子を目にし、オンライン注文やデリバリーの仕組みが高度に発達していることも実感した。

## 食文化

現地で味わった食事は、非常に印象深いものであった。食べ物も多種多様で面白かったが、スイカやパッションフルーツのジュース、豆乳、とうもろこしの飲み物など、日本ではあまり見かけないユニークな味わいの飲料が次々と現れ、口にすると新鮮な驚きと発見があった。私は米線料理と、そして意外にも乳製品が気に入った。口に合うものもあれば馴染みのない味もあったが、現地の空気や雰囲気とともに味わう一口一口が、旅の思い出をさらに豊かにしてくれた。

## 人的交流

現地で出会った学生の多くは、アニメといった日本のエンターテインメントが好きで、WeChat のアイコンまでお気に入りのキャラクターにしているほどだった。こうした交流を通して、日本のエンタメ産業が両国の友好に果たす役割の大きさを改めて実感し、今後さらに伸ばしていくべき分野であることを感じた。また、異なる文化や価値観を持つ人々と直接触れ合うことで、自分自身や日本という国を客観的に見つめ直すきっかけにもなった。言語や文化の壁を越えて互いに理解し合おうとする体験は、視野を広げる貴重な機会となった。

・訪中に際して

まずは、貴重な機会を用意していただいた、中国駐名古屋総領事館の皆さまに感謝申し上げます。私は学部時代にも、北京の精華大学の学生たちと議論する機会があり、中日友好には関心が強くありました。国際化が進むなかでもとくに隣国である中国と、政治的・経済的、また文化的にも友好を結ぶことは、両国の発展に欠かせません。歴史的な事実は消えることは無いですが、未来のためには今両国が強く結びつくことが必要で、そのために我々若者が行動しなければならないとつくづく考えていました。そのため、訪中団の話をいただいたときは、念願叶った思いでした。

・全体を通して

5泊6日で、大学や小学校、奥地にある棚田やベトナムとの国境など、通常の観光では訪れることのできない場所に訪問いたしました。この訪問を通じて、限られた期間ではありましたが、中国の多様な側面を肌で感じる事ができ、特に現地の方々との対話からは、中国の皆様の温かさと優しさに触れることができました。雲南大学、雲南師範大学、昆明理工大学の学生らとは、各国の教育や文化の共有などを通して語り合うことができた。皆が「日本に行きたい」、「また雲南に来てね」と言ってくれたことに感激した。

一方で、政治や教育といったより深いテーマについて議論する機会（時間）が少なかったことは、今後の課題と捉えております。本訪問に先立ち、中日のオンラインでの交流会等、相互理解を深める機会があれば、より活発かつ有意義な議論に繋がったものと考えます。

今回訪問したタイミングは奇しくも中国抗日戦争の勝利80周年が祝福されている時期であった。そのため、私は非常に緊張感を持っていた。しかし、抗日戦争の横断幕さえあるものの、批判的な目で見られたことは一切なく、むしろ市民の皆様は歓迎してくださった。ここに、平和の尊さを深く感じた。

訪問団は、年齢も大学も異なる20名強の学生で構成されておりましたが、わずか6日間でこれほどまでに深い友情を築けたことに、大きな感動を覚えました。若者たちのこの熱量があれば、必ずや日本と中国の友好関係をより強固なものにできると確信しております。

## ・特に印象に残ったこと

1番印象に残ったのは近平県の中国-赤道ギニア友情小学校です。赤道ギニアが校舎の建設費を寄付したことで、複数の少数民族の子供たちが質の高い教育を受けていることに感銘を受けました。そこで拝見した生徒たちの絵画に、日中戦争がテーマとして描かれていたことに驚きました。小学校教育から複雑な戦争の歴史を学んでいることに衝撃を受けると同時に、彼らがその歴史の背景をどこまで理解しているのか、深く考えさせられました。

また、ミヤオ族・ヤオ族・ダイ族といった多様な少数民族が、相互に尊重し合いながら共生している姿は、我々が目指すべき理想的な社会のあり方を示唆しているようでした。幼少～青年期の教育が学力や人格を形成するために重要なように、若者時代の外交が各国との友好のためには非常に重要です。今回の訪中団のような対面交流が望ましいですが、授業・オンラインでの国際交流も、友好の手助けになると考えました。

人種や文化の違いを乗り越え、多様性を尊重し、互いに支え合える関係を築くことを心から願っております。私自身、今後の研究活動（農学修士）を含め、仕事などあらゆる場面において、先入観にとらわれることなく、常に相手を尊重する心を大切にしていきたいと思います。最後に、訪中団の継続的な活動をはじめとした、中日友好の益々のご発展と、世界平和の実現をご祈念申し上げます。



Photo1.

棚田にて、同じ方向を見つめる日中の2人



Photo2.

睡蓮と池@昆明植物園



Photo3.

少数民族衣装体験@雲南民族村